

## 二つの異次元世界を持とう！

現代社会は、貨幣争奪の修羅場である！

よりよい製品を開発して、より多く売れるように努力するのが最も素直なお金儲けの手法です。それは市場を経由して消費者を豊かにします。

しかし、そのような商品を作り出すことができない人びとでも、お金は必要です。というより、お金がなければ、どうしようもないのが現代社会です。ですから、まともな方法では、金儲けができない人びとは、悪いことを考えてでもお金を獲得しようとしします。

世界の GNP が拡大に継ぐ拡大を続けた時代ならば、誰にでもおこぼれが回ってくるのでよかったです。成長が止まってしまうと、貨幣争奪の修羅場の様相を強めます。副作用として、貧富の差の拡大が進みます。(貧富差を表す「ジニ係数」は世界的にも国内的にも拡大の傾向にあります。)

そこで、悪徳商品が出回るのです。不当表示、まがい物、リハウスでのごまかし、オレオレ詐欺、数え上げれば切がありません。どんどん新手の儲けの手口が生まれています。金持ちが、短期的に巨万の富を手に入れるには、デリバティブ（金融派生商品）などがあるようです。

悪徳商法の歯止め、悪さの限界を決めたのが法律ですが、法の限界すれすれで金儲けをするのはどうすればいいか？ そればかりを考える人もいることでしょう。こうして、社会は、貨幣争奪戦一色となりました。お金は便利であると同時に悪魔でもあったのです。すべての社会の構成員が貨幣に追われ、時間も費やして、人間性を喪失していきます。人類は、ついにお金の奴隷と化したのです。

ちなみに、毎日、新聞に挟まれてくる広告紙の重さ。それは売りたいためですが、もとはお金がほしいからです。紙は熱帯地方の樹木を伐採します。森林破壊は地球温暖化や洪水を助長します。結局お金が地球環境を悪化させているのです。

人間が人間らしくあるために、もう一つの世界を持とう！

貨幣によらないですむ社会の創造です。たとえば、昔の大家族は社会の単位でした。家族数を 20 人としましょうか。そこには、家屋と田畑があり、普請の精神で作業します。互いの協力で共生的な生活をしますから、赤子も老人も生きていけます。貨幣はなくとも財やサービスは受けられるのです。

現代社会は、上品に言えば自由競争社会、資本の裸の論理でいえば、貨幣争奪戦です。その対極にあるのが、協力・共生社会です。利己の世界と贈与の世界！

そこで、家族数 20 人が拡大して 100 人程度となったとしましょうか。そこではもはや純粋に与え合うだけでは無理となります。そこで生まれるのが、利子の付かない地域通貨です。

100 人とかを単位とする「新しき村」を、今や過疎地と化した田舎に建設します。建設と言っても、むしろ、理念、目的、仕掛け、ソフトなシステムの問題です。このような社

会を全国津々浦々で建設して、都会の人々はそこで週末を過ごし、月曜日には再び都市で貨幣争奪戦の世界に戻ります。このようなハイブリッドな生活パターンを可能とする国土を建設しましょう。都市農村の交流を盛んにして、過疎地の蘇りにも一役買います。

お金のためならうそをついても平気になってしまう「うそつき病がはびこるアメリカ」(デビットカラハン)とは一線を画しましょう。そこでは時間に追いかけることもなく、時の流れを忘れることもできます。心が本来のヒトに帰っていくのです。見上げれば、満天の空に無数の星が煌いています。宇宙の広大さを想い、真理の深遠さを想います。

「いまだかつて金銭がこれほどまでに、唯一の主人であり、神であったためしはない。そしてかくも富者が貧者にたいして防禦され、かくも貧者が富者にたいして無防禦であったためしはない。そしてかくも現世的なるものが精神的なるものにたいして防禦されていたためしはなく、かくも精神的なるものが現世的なるものにたいして無防禦であったためしはない。そしてかくも強者が弱者にたいして防禦されていたためしはなく、かくも弱者が強者にたいして無防禦であったためしはない」(ペギー：1873～1914)(桑原武夫編 「一日一言」岩波新書)